

「育てる、教育する」意識よりは、「育む」意識が大切

「プロフェッショナル・仕事の流儀『背伸びが人を育てる』」を見た。

国公立大の合格率を驚異的にアップさせた公立高校の校長へのインタビュー番組であった。

当県でも合格率アップのためか、高校受験全県制採用や男女共学制等で議論沸騰で賑やかなだけに、この高校の驚異的合格率アップの裏には教委の方針と合致した学力優秀な生徒を集め易い何か策があったのでは？と勘繰りたくもなるが、番組ではそこまで踏み込んでいなかったのはもの足りなかった。

裏事情の詮索はさておき、自分が関心を持ったのは、「探究基礎」とよばれる、生徒一人一人が自ら研究テーマを設定し、最終的には英語で論文作成までを行う独自のカリキュラムを採り入れている点であった。

番組では、このカリキュラム方式で生徒全員のモチベーションをあげ、確かな目的を持った「大人」になるような全人的教育を志しているという。

それを可能にするのは、教師集団も議論を重ね、今、生徒に何が必要かを考えさせ、生徒一人を学校全体で支え、生徒の「やる気」を引き出していくとか。

生徒の各テーマに寄り添う力量を問われるだけに、教師たちにも厳しいカリキュラムだろうなあと思ふ。

さて、このカリキュラムに関心をもったのは、次の理由による。

自分は「生きる喜び」とは、①人と係わり合う喜び。②知らないことを知る喜び。」と思っている。

子どもや生徒、学生はいうに及ばず我々大人とて、「知らないことを知る喜び」を感じると、自ずと探求・勉学するものである。

この高校では生徒のテーマに学校全体で支えてくれるのだから、そこには教師、級友等との「人と係わり合う喜び」を感じることもできるのだろうと推測する。

番組では、ある生徒の「先生、しんどいけど、勉強っておもしろい」の言葉が紹介されていた。

また私は、子どもや生徒、学生を「育てる、教える」という意識よりは、「育む」という意識が大切と思い、お気づきのように当 HP 記事内でも最近「育む」を意識して使っている。

本人の中に「やる気ー生きる喜びー」が育まれる教育活動でないと、強要でしかなく「勉強嫌い」になると思う。

当 HP のタイトルは「雑学」であるが、「知っていなくてもいい雑学」ではなく、『人間』を理解するには、あらゆる分野に関心をもたなくては…』との「知る喜び」への思いからの命名である。